

悲願の金へ 多彩な戦略

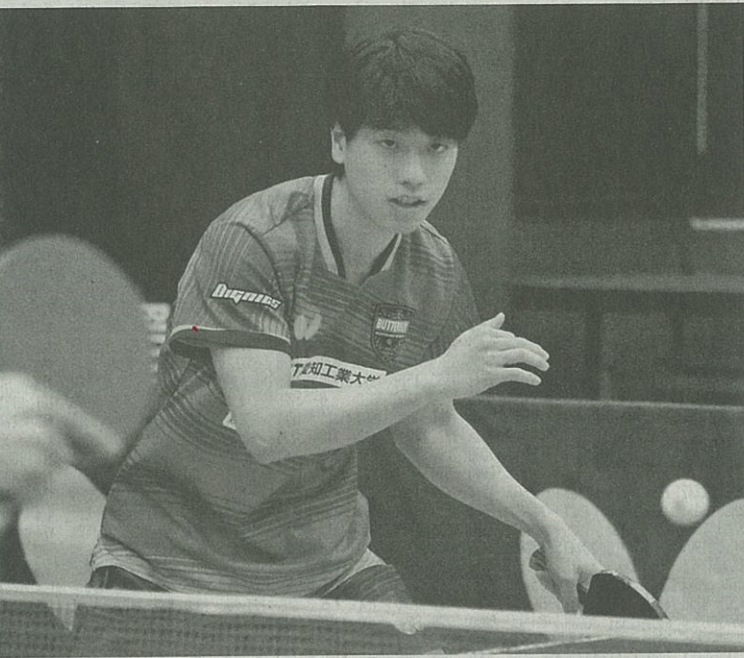
卓球のパリ五輪日本代表が2月に決まり、男子団体戦メンバーに愛知工業大2年の篠塚大登選手(20)が選ばれた。直後に行われた世界選手権団体戦では2021年東京五輪金メダルの馬竜選手(中国)と接戦を演じ、「勝つチャンスがあると考えた。金メダルを目指したい気持ちが湧いてきた」と五輪への思いを語った。

た。卓球で愛知県出身の五輪代表選手は、04年アテネ大会の松下浩二さん(トリリーグ初代チェアマン)と鬼頭明さん(現愛工大卓球部総監督)以来。篠塚選手は5歳で卓球を始めた。高校教諭の父、和幸さんが卓球部の顧問を任せられ、興味を持ったことがきっかけだった。右利きだが、ラケット

トだけは卓球で有利とされる左手で握る。和幸さんの勧めだ。ボールを操る繊細なタッチは「天才肌」と評され、多彩な戦略が持ち味。第一人者で同年の張本智和選手から刺激を受け、愛工大名電高時代から国内最高峰のトリリーグでプロ選手と競い、力をつけ

た。五輪代表選考レースを争う上で痛いはずの故障が、終盤の追い上げにつながった。昨年5月、練習中に腰を痛めた。歩けないほどで、直後にあった選考ポイント対象の世界選手権個人戦を欠場。選手になって初めて2か月近くラケットを握らない日々を過ごしたが、「これも運命。選考レースで気を休める時がなかったの、逆にほっとした」と振り返る。そして、「治ったら絶対にもっと上を目指そう」と強く決意したという。

吹っ切れてコートに戻る。成績も上がり始めた。それまで「考え過ぎてしまう」と海外試合が苦手だったが、「試合をするだけ」と、シンプルに考えになつてうまくいき始めた。1月の全日本選手権シングルスでは代表を競い、「勝たないと(パリ五輪は)ないと思っていた」松島輝空選手に4-3の大熱戦の末、勝利。選考ポイント3位となり、代表に滑り込んだ。愛知県東海市の出身。「地元に戻ると落ち着く」と郷土愛が深い。同市出身に、フィギュアスケートペアで五輪出場を続けている木原龍一選手がいる。コロナ禍前だった18年平昌大会では、木原選手を応援するために、市内でパブリックビューイングが開かれた。「出身地を有名にした。もし、自分の時もあれば、うれしいです」と笑みがこぼれた。



パリ五輪代表に決まった篠塚選手(愛知県豊田市の愛知工業大で)

パリ代表には津市出身の戸上隼輔選手(22)(明大)がシングルスでも選ばれた。強打が持ち味の戸上選手と、五輪でダブルスを組むことがありそう、役割が決まってやりやすい」と語る。卓球男子は張本選手を含めた代表3選手のうち2選手が、東海地方出身。団体は16年リオデジャネイロ大会で銀、東京大会は銅。悲願の金メダルへ、篠塚選手らの活躍に注目だ。

「試合をするだけ」と、シンプルに考えになつてうまくいき始めた。1月の全日本選手権シングルスでは代表を競い、「勝たないと(パリ五輪は)ないと思っていた」松島輝空選手に4-3の大熱戦の末、勝利。選考ポイント3位となり、代表に滑り込んだ。愛知県東海市の出身。「地元に戻ると落ち着く」と郷土愛が深い。同市出身に、フィギュアスケートペアで五輪出場を続けている木原龍一選手がいる。コロナ禍前だった18年平昌大会では、木原選手を応援するために、市内でパブリックビューイングが開かれた。「出身地を有名にした。もし、自分の時もあれば、うれしいです」と笑みがこぼれた。

(宮島出)